

担任教師主導の小学校英語教育における テストの作成について

高橋 美由紀

(愛知教育大学)

柳 善和

(名古屋学院大学)

Abstract

The purpose of this study is to examine whether homeroom teachers in elementary schools can make appropriate tests of English for their pupils. Foreign Language Activities is supposed to be introduced in the 5th and 6th grade in elementary schools in 2011, but in that subject, the evaluation for the pupils should be reported in passage not in some points or grades. However, for these two years, pupils are expected to increase their English abilities, so some kind of tests should be necessary to evaluate their English abilities more clearly. In this study homeroom teachers try to make tests to evaluate the English abilities of the pupils, and tried them to the pupils. The results show that the pupils have enough ability of English to understand simple sentences and dialogues with the help of pictures and that homeroom teachers can make English tests which are appropriate enough to evaluate the English ability of the pupils within their limited working hours.

1. はじめに

この研究の目的は、小学校外国語活動において担任教師が児童を評価するに当たって、他の教科と同様に一斉テストを作成し、児童の達成度を評価することができるかどうかを検証することである。このことによって、児童の英語能力をよりの確に把握し、指導・学習にその成果を反映させることが可能になると考えられる。本研究では担任教師が実際にテストを作成して実施し、その結果を検討することで、その問題点も併せて検討する。

2. 「小学校外国語活動」の評価

2.1 文部科学省による「小学校外国語活動」の評価の考え方

文部科学省(2008b)は「移行期間中における小学校児童指導要録及び中学校生徒指導要録の取扱について」において小学校外国語活動の評価について次の様に述べている。

小学校外国語活動を実施する学校においては小学校児童指導要録に外国語活動の記録を行うこととする。その際の小学校児童指導要録の様式は、別添の「参考様式」を参考に、各学校で評価の観点を定めて、評価を文章で記述する欄を設けるなど、各設置者において適切に定めることとする。

評価に当たっては、外国語活動で行った学習活動及び当該活動に関して指導の目標や内容に基づいて定めた評価の観点を記載した上で、それらの観点到照らし、児童の学習状況における顕著な事項などを記入するなど、児童にどのような態度が身についたか、どのような

理解が深まったかなどを文章で記述することとする。その際の評価の観点については、文部科学省発行「英語ノート指導資料第5学年」「英語ノート指導資料第6学年」に示した「評価規準例」を参考とすることが考えられる。

(文部科学省 2008b)

つまり、小学校外国語活動の評価については、点数としての評価はせずに、文章による評価を行うことになる。さらに、その評価の基準については「児童の学習状況における顕著な事項」「身についた態度」「理解の内容」としている。

このようなことを念頭に置いて小学校外国語活動の評価の方法として、実際に担任教師が実施しているのは次のような方法である。

第1には通常の授業における児童の観察による評価である。第2には、授業の最後に児童が書く「振り返りシート」などの自己評価の結果である。これらの評価をもとにして、学期ごとに保護者にその様子を報告し(通知表など)、さらに最終評価として指導要録に記入することになる。

2.2 小学校外国語活動と中学校外国語科の評価の観点

「小学校外国語活動」の評価に関して、保護者への報告という目的が重要であるが、さらに児童が進学する中学校への報告も同時に必要である。小学校外国語活動で何がどこまで出来るようになっているのかを中学校へ報告し、中学校側では、それを基にして中学校での英語教育を実施する上での資料としなくてはならない。特にこれまで中学校では、学校外で英語学習を始めている児童がいることは認識しているが、中学校入学時から英語学習が始まることを一応の前提として、指導計画を立ててきた。今後は公式に小学校で必修として英語を学習して中学校に入学することを前

提にして指導計画を立てることになり、そのための資料は是非とも必要である。

文部科学省(2009)は、「各教科等・各学年等の評価の観点等及びその趣旨」で、小学校外国語活動と中学校英語教育の評価の観点を次の様に示している。

<小学校外国語活動>

観 点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ 親しみ		言語や文化に対する気付き
趣 旨	コミュニケーションに関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。		外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。

<中学校外国語科>

観 点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
趣 旨	コミュニケーションに関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	外国語で話したり書いたりして、自分の考えなどを表現している。	外国語を聞いたり読んだりして、話し手や書き手の意向などを理解している。	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けているとともに、その背景にある文化を理解している。

図1 小学校外国語活動と中学校外国語科の評価の観点及びその趣旨¹

この図1に書かれている内容について、次のような点が見える。

第1に、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」について、観点は同じであり小学校、中学校で一貫した方針であると考えられる。

第2に、中学校で「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」としている観点は、小学校では「外国語への慣れ親しみ」として一つの観点にまとめられている。しかし、この「慣れ親しみ」ということによって具体的にどのような能力を目指すのかは明確にされていない。

第3に、中学校で「言語や文化についての知識・理解」は、小学校で「言語や文化に対する気付き」とされていて、ここでも「気付き」がどのような状態になった場合に、児童が「気付いた」とするのかは明確にされていない。

第2、第3の点で小学校と中学校の評価の観点が一致していないことは、小学校と中学校の英語教育を円滑に連携する際の障害になりかねない。両方で評価基準を統一して、小学校で学習した内容が明確に中学校に伝達できる仕組みを用意する必要がある。

2.3 「テスト」による小学校外国語活動の評価

これまでに述べた小学校外国語活動の評価の現状を考えると、児童が小学校で蓄積した英語能力を明確に説明できるのか、という問題があることがわかる。現状での評価方法に加えて、さらに英語能力を評価する方法を用意しておくことも選択肢に含まれるだろう。

現状では「点数による評価はしない」という考え方が明示されているので、小学校外国語活動ではいわゆる筆記テスト(音声によって出題し、筆記で解答する問題形式も含む)は実施されていない。しかしこれは、将来も実施しないということの意味しているわけではない。

第1に、保護者への報告に際して、児童の「関心、意欲、態度」といっ

た観点を文章によって記述するだけでは不十分で、もっと明瞭性を考慮する必要がある。保護者は子どもたちが小学校の学習でどのくらい出来るようになったかを知りたいと思うのは当然のことであり、他の「教科」ではそのような報告が届けられるのに、「外国語活動」では主観的なコメントしかもらえないというのでは不満も生じかねない。

第 2 に、文部科学省(2008a)では、外国語活動は小学校 5 年生から年間 35 時間実施することになっているが、2 年間にわたって合計 70 時間の授業を実施すると、児童の外国語能力はかなり蓄積されることが予想される。そのような学力の蓄積を評価する手段として、文章による抽象的な報告だけで十分であるかは検討の余地がある。さらに今後英語教育の導入時期が例えば 3 学年に繰り上がったり、教科として組み込まれたりした場合には、現状のような評価方法では十分でないことは明らかである。

さらに第 3 に、小学校では筆記テストを導入しないことになっていても、民間の英語教室などには積極的に導入している場合も見られるし、また英語能力試験としても「児童英検」などいくつかすでに普及している。学校外だけでこのように筆記テストが普及している現状は、児童の教育機会の格差にもつながり、小学校としても対策を講じる必要があるだろう。

3. 担任教師による外国語活動のテストの作成

3.1 テスト作成の経緯

本研究において、外国語活動のテストを作成したのは A 市立 S 小学校の 5 学年の担任教師である。S 小学校は 5 学年の学級数は 3 学級で、2007 年度以前から 5～6 年生で年間 20 時間程度外国語活動(当時は英語活動)を実施してきた。2008 年度からは、担任主導の外国語活動を 1 学年から全学年で実施するようになった。実施に当たっては ALT や地域人材の活

用、電子黒板の導入など積極的に支援を行っているが、基本的には担任が中心になって授業を行っており、2008年度の研究発表会では全員の教員が2時間に分かれて自分の担任している学級で研究授業を公開した。

テストは、5学年3学級で実施し、外国語活動の時間に学習したことを児童がどこまで出来るようになったかを把握することを目的としている。5学年の担任教師3名がテストを作成し、それぞれの学級で実施した後、担任教師によって採点された。テストの作成に当たって筆者らは直接参加することはしていない。テストの目的を確認し、できるだけ日常の担任教師としての業務に無理がないように、既成の教材などを利用して作成すること、問題については音声を中心にし、必要な音声はALTなどの協力を仰ぐことを話し合ったのみである。

このテスト作成から実施、採点に至る一連の過程で次のことを検討する。

- ① 担任教師によるテスト作成はどのように進められるか。
- ② 担任教によって作成されたテストで児童はどのような結果を出せるか。
- ③ テスト作成に伴うその他の問題点としてどのようなことがあるか。

3.2 テストの概要

今回作成したテストは、大問5題で小問20題であった。以下に問題とその数などを示す。各問題の例はAppendixに掲載している。なお、配点は小問1題につき5点としている。

1. 英語を聞いて、英語にあっている絵を一つ選び、○をぬりましょう（小問6題）。
2. ケンがレストランで注文をしています。英語を聞いてケンが注文し

たメニューに○印を書き込みましょう（正解 3）。

3. 英語を聞いてだれがどんなパフェを好きなのか線で結びなさい（小問 3 題）。
4. 次の英語を聞いて、ケンが着ている洋服と合っていれば○、違っていたら×を（ ）の中につけましょう（小問 3 題）。
5. 次の自己紹介を聞いて、それぞれが好きなものであれば○、きらいなものであれば×を（ ）の中に書きましょう（小問 3 題）。

いずれの問題も、『英語ノート』をはじめ、既成のイラストを使用している。音声については、ALT に録音を依頼している。

3.3. テストの結果

テストの総点の平均は 84.22 点(N=32)、標準偏差は 12.06 点であった。最高点は 100 点（7 名）、最低点は 60 点（1 名）であった。得点分布は図 2 に示すとおりである。100 点が 7 名いるのに対して、90 点と 95 点が 5 名、80 点と 85 点が 11 名、70 点と 75 点が 5 名、60 点と 65 点が 4 名であった。おおよそ平均点付近の 80 点と 85 点に固まっているが、100 点に 7 名いることから、外国語活動について完全に理解し、英語能力の高い児童の集団が存在していることがわかる。

問題別の正答率は下の表 1 と表 2 に示している。総点の平均が 84 点であることから、ほとんどの問題で 80～100%の正答率が得られている。

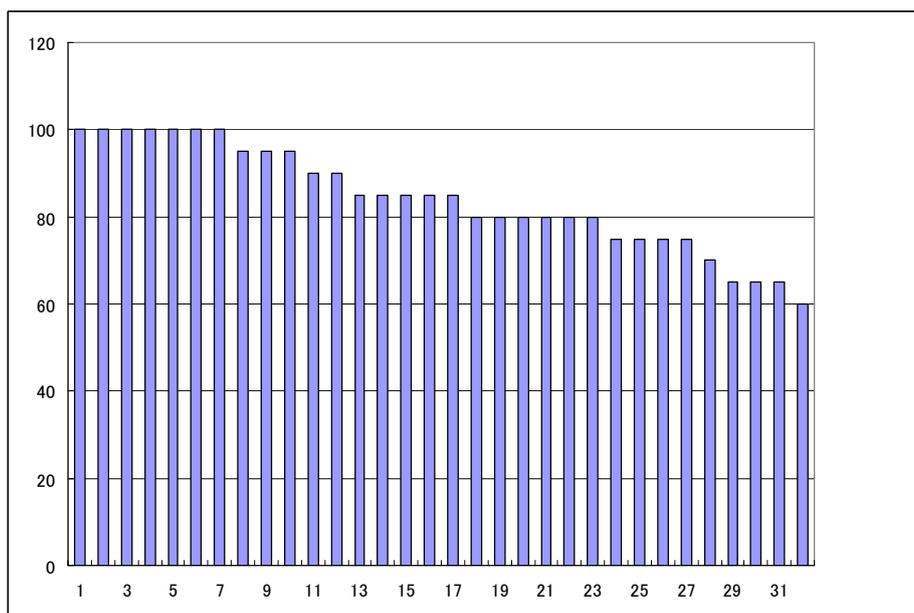


図 2 総点の分布(N=32)

問題 番号	1(1)	1(2)	1(3)	1(4)	1(5)	1(6)	1(7)	1(8)	2	3 ま い	3 け ん	3 あ き
正 答 者 数	32	32	31	12	32	30	27	24	30	30	26	26
正 答 率	100 .0	100 .0	96. 9	37. 5	100 .0	93. 8	84. 4	75. 0	93. 8	93. 8	81. 3	81. 3

表 1 問題別の正解率(問 1～問 3) (N=32)

問題 番号	4(1)	4(2)	4(3)	5(1) ○	5(1) ×	5(2) ○	5(2) ×	5(3) ○	5(3) ×
正答 者数	25	24	19	25	26	28	30	29	26
正答 率	78.1	75.0	59.4	78.1	81.3	87.5	93.8	90.6	81.3

表 2 問題別の正解率（問 4～問 5）（N=32）

3.4 テストの結果に関する考察

ここでは 3.3 で示した、テスト結果について、児童の英語能力の観点とテスト作成に関わる観点について、それぞれいくつかの点から考察を加える。

まず今回のテストから分かる児童の英語能力について論じたい。

第 1 に、総点の平均点が 84.22 点であることから、児童は通常の外国語活動の授業で行っている活動をよく理解していることがわかる。また図 1 で示した得点の分布状況から、極端に外国語活動を苦手としている児童はいないか、いても少数であることがわかる。ただし、前述のように 100 点を取った児童が 7 名あり、その一方で 80 点と 85 点の児童が 11 名いることから、明瞭にはなっていないが、学級の中に外国語活動の内容を超える英語能力を持った児童が一定数存在していることもわかる。

第 2 に、問題別の正答率を見ると、ほとんどの問題で 80%～100%の正答率が得られている。一般的に、問題文が長くなったり、否定文が使われたりすると正答率が下がる傾向もあるが、本研究のデータからは明確な証拠は得られていない。

次に担任教師によるテストの作成について論じる。

担任教師がテストを作成することは、一般的に、①自分の授業の内容を反映したテスト作成が可能になる、②テスト作成の過程を十分に理解することにより、自分の担任の児童の学習状況を把握することが容易になる、などの利点が考えられる。一方で、自分でテストを作成するために割く時間があまり多くなると勤務全体を圧迫することになる。特に、慣れない英語のテストを作成するとなると時間も余分にかかることになる。英語の試験の場合には今後問題文などを音声で与える必要があり、そのための音源をどのように手に入れるかという問題もある。今回のテストでは学校で一緒に授業を行っている ALT をお願いしている。音声ファイルの編集などはパソコン上で出来るのでそれほど煩雑ではない。また、今回のテストについては、問題のイラストに実際に外国語活動で使用している『英語ノート』のものを使用して、他から探したり自分で作成したりする手間を省いている。総合して考えると、慣れればテストの作成にはそれほどの時間はかからなくなると思われる。

次に、前述のように、外国語活動のテストを作成する際には、音声による問題が中心になる。児童は英語の文字を認識することはできるが、単語や文を読むことはできない。したがって、音声による問題に対して選択枝を用意する際には、単語や文でなくてイラストなどで示す必要がある。今回はそのために、色などがわかるようにテスト問題をカラー印刷して配布している。また、色などを問う問題でなくても、カラー印刷にしたことで、イラストが示しているものが明確に分かるようになった。

さらに、イラストで選択枝を用意する場合に問題となるのは、児童がそのイラストの意味する箇所が明確に理解できなくてはならない。今回のテストで、正答率が最も低かった問題は 1(4)で、正答率は 37.5%であった。この問題は次の図 3 に示すような選択枝が用意されていた。

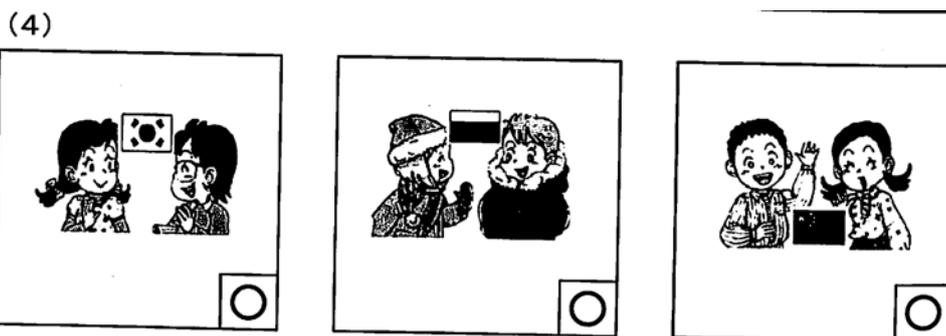


図3 問1(4) に用意された選択肢

この選択肢では問題文で **Korea** という単語を与えているので、児童は韓国が答えであることは理解できた可能性がある。しかし、この選択肢では衣装でどの国かのヒントはあるが、最終的には国旗によって国の区別をするようになっている。児童は韓国の国旗が分からず正答を選ぶことができなかつたと考えられる。誤答を見ると、正答の左（韓国）が12名であったのに対して、真ん中（ロシア）が17名、右（中国）が3名であった。中国は衣装か国旗で分かつたのかもしれないが、韓国とロシアのイラストはどちらかを定めることができなかつたことが分かる。ちなみに、前述のように、テストはカラーで印刷してあるので、実際のテストでは国旗は明瞭に分かるようになっている。

このようなことから、文字の指導が無いままにテストを作成することには、一定の限界があると考えられる。

4. おわりに

本研究は外国語活動の一斉テストを担当教師が作成することに伴う諸問題を論じている。2011年度から導入される外国語活動では、このようなテストを想定してはいない。しかし、5学年と6学年で学習する70時

間の外国語活動によって、児童が蓄積する英語能力は一定のレベルになると考えられる。このような学習の成果をどのように評価し、中学校での英語学習と連携するかは、まさに将来の課題であり、担任教師によって何処までそのような評価が可能になるのかを検証しておくことは重要な課題であると考えた。

本研究では、5 学年の学習内容を対象にして、①担任教師がテストを作成することは可能である、②担任教師が作成したテストは児童の英語能力を評価することに貢献できる、③文字言語を使わずにテストを作成することには一定の限界がある、ということを示すことができた。今後はテストの対象を 6 学年に広げること、担任教師の数を拡大すること、本研究で一部明らかになったイラストによる選択肢作成の限界をどのように考えるか、などについて研究を続ける必要があると考える。

註

1. 文部科学省(2009)のうち小学校外国語活動、中学校外国語科の部分を取り出して筆者らが作成した。
2. もともとのテストはカラー印刷してあるので、色の違いなども明確で、イラストも掲載したものよりもわかりやすい。

引用文献

文部科学省 (2008a) 『小学校学習指導要領』

文部科学省(2008b) 「移行期間中における小学校児童指導要録及び中学校生徒指導要録の取扱について」

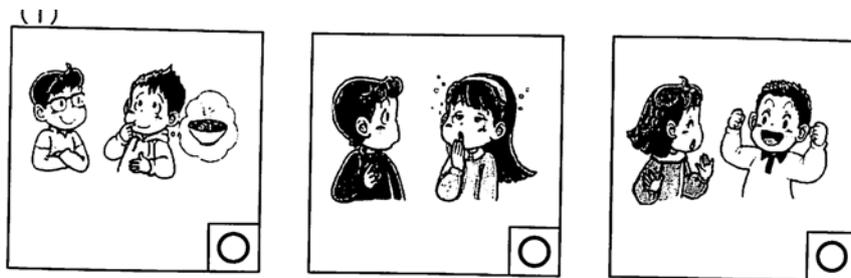
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2009/01/15/1217785_2.pdf

文部科学省 (2009) 「各教科等・各学年等の評価の観点等及びその趣旨」

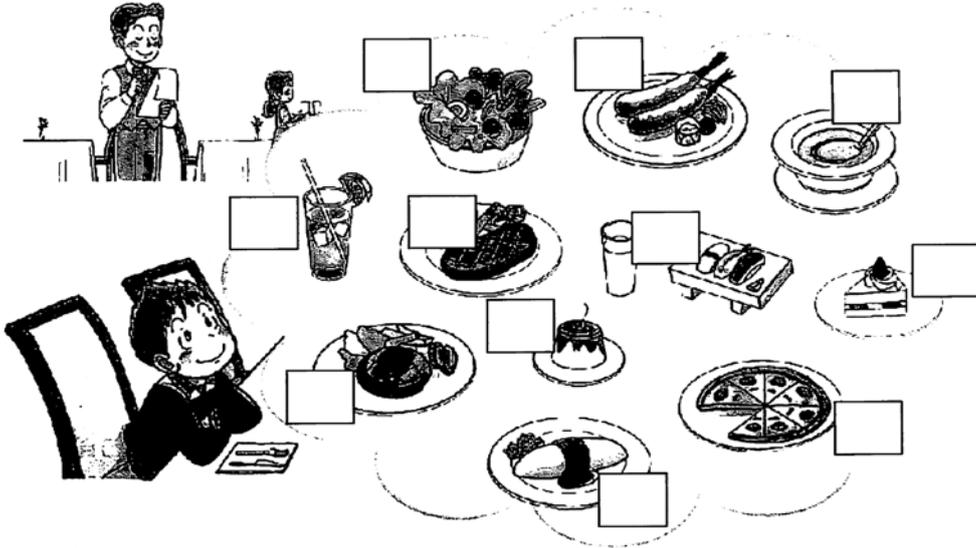
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/nc/_icsFiles/afieldfile/2010/05/13/1292899_1.pdf

Appendix

1. 英語を聞いて、英語にあっている絵を一つ選び、○をぬりましょう (小問 8)



2. ケンがレストランで注文をしています。英語を聞いてケンが注文したメニューに○印を書き込みましょう（正解3つ）。



3. 英語を聞いてだれがどんなパフェを好きなのか線で結びなさい（小問3）。



4. 次の英語を聞いて、ケンが着ている洋服と合っていれば○、違っていたら×を () の中につけましょう (小問 3)。

(1)	(2)	(3)
		
()	()	()

5. 次の自己紹介を聞いて、それぞれが好きなものであれば○、きらいなものであれば×を () の中に書きましょう (小問 3)。

(1)	えみ 						
	()	()	()	()	()	()	